

瑠璃光院大日如来像と平泉周辺の菩薩形坐像

佐々木 あすか

はじめに

岩手県瑠璃光院大日如来像（以下「本像」と呼称、図1～13）は、中尊寺山内に伝わる平安時代後期の優れた大日如来像として古くより紹介されてきた^{（注一）}。本像の写真は、『中尊寺大鏡』^{（注二）}に正面、左側面、背面、像底が掲載され、他書においてほかの角度からの写真が掲載されることもあるものの、細部の検討をおこなうにはやや不十分であった^{（注三）}。本稿では、瑠璃光院および中尊寺のご高配を得て本像を調査させていただいた際の知見をもとに、本像の基本情報を紹介したい。併せて本像の制作時期を着衣形式の観点から推定し、平泉およびその周辺の菩薩形坐像との共通性と、中央の仏像からの影響について若干の考察をおこないたい。

一、瑠璃光院大日如来像の概要

まず本像の概要をまとめる。本像は像高五六・八センチ^{（注四）}の智拳印を結ぶ金剛界大日如来像である。

（一）形状

元結を上下二段にあらわす（上元結紐二条、下元結帯一条）。上元結紐上方の頭頂に輪状の髪束一をつくり、それ以外の髪を左右に分け、各髪束を後方から前方へ巻く（螺髻）。髻、マバラ彫り。天冠台上地髪部、天冠台下地髪部（耳より後ろ）、平彫り。天冠台下地髪部（耳より前）、束ね目入り毛筋彫り。天冠台、紐一条―連珠文―紐一条―列弁―花形。鬢髪耳をわたる。耳垂環状、貫通。三道相をあらわす。

条帛をつける。正面では、左脇腹辺で末端をいったんたるま

せ、主条上端より垂下する。腹部中央から右脇腹にかけて、主条の上端を折返す。背面では、主条の下端から末端を垂下する。

下半身の着衣は、下記のとおり五段にあらわす(図12・13、図版の①～⑤は着衣の段数を示す。以下同様)。この下半身の着衣の特徴は、後述するように制作時期を推定する一材料となると思われる、また平泉およびその周辺の菩薩形坐像の作例とも共通するため、詳しく記述する。

(上から)一段目…裙折返し部…正面中央に大きめの花卉形をあらわす。背面中央、左右体側にそれぞれ折りたたみをあらわす。各折りたたみ間に、弧状の衣文線をあらわす。一段目の下縁を、三段目の上層にかぶせる。

二段目…裙表か…正面右大腿部付根付近、背面中央、左側面、右側面にわずかにあらわす^(注五)。一段目の衣よりも一段低く彫出する。

三段目…腰布か…臀部から大腿部上方をめぐる。衣文は衣縁と平行にあらわす。三段目の下端を、四段目の上層にかぶせる。右大腿部上面、および左大腿部上面から背面中央にかけて、上端を一段折返す。

四段目…腰布か…大腿部下方をめぐる。大腿部側面において、衣文は弧状にあらわす。四段目の下端を、五段目の上層にかぶせる。左右ともに、下端を一段折返す。

五段目…裙…膝上から右足首、左足半ばまでを覆う。下端を右足首上で折返す。右足首付近で、裙を敷き込む。右足首をまわる裙下端の裏地をあらわす。左足のかかとを覆う。右脛部では、右足甲の敷き込む部分に収斂する衣文線を、左脛部では正面左寄り

の地付き付近に収斂する衣文線をあらわす。

両手を屈臂し、正面中央で智拳印を結ぶ。右足を上にして結跏趺坐する。

(二) 品質・構造^(注六)

木造(カツラ材)、寄木造り。

頭体の幹部は、髻を含め左右二材より彫成し、内刳りのうえ割首する^(注七)。両腕は、肩、臂、手首を刳ぐ。両腰脇三角材、両脚部、裳先を刳ぐ。

表面は、錆漆下地に漆箔とする。瞳に黒色、唇に赤色が認められる。

(三) 保存状態

亡失…垂髪、装身具、光背、台座

後補…裳先、表面の漆箔^(注八)

このほか、各矧目、像底地付に補修が認められる。

二、瑠璃光院大日如来像の着衣形式の特徴

次に、本像の特徴と思われる下半身にまとう裙・腰布の着衣形式を取り上げたい。この特徴は、本像の制作時期を推定する際の一助ともなると思われるためである。かつて筆者が平安時代後期から鎌倉時代初期の菩薩形坐像における裙・腰布の着衣形式の展開について検討をした際に、十二世紀第四四半期以降に新たにあらわれる新形式を「折衷型」と名づけ、折衷型作例の一覧中に平泉

での作例としては本像と中尊寺一字金輪像を挙げた^(注九)。その際には「折衷型」の個々の作例については図版とともに述べることができなかつたため、本像を例に改めて「折衷型」の着衣形式にも注目したい。

拙稿での裙・腰布の着衣形式の展開をまとめると、(1)十一世紀後半〜十二世紀の平安時代後期の典型形式(「大倉普賢型」〔図14・15〕、「定禪寺不動型」〔図16・17〕と呼称。菩薩形像と明王像で異なる形式を用いる)^(注一〇)に対し、十二世紀半ば以降、(2)奈良仏師作例において典型となる形式(「円成寺大日型」〔図18・19〕、「金剛峯寺孔雀型」の二種類。菩薩形像と明王像で共通)^(注一一)があらわれることを述べた。そして十二世紀第四四半期には、従来の(1)(2)どちらにも分類できない新たな形式があらわれ、それを(3)「折衷型」と名づけた。(3)「折衷型」の着衣形式を示す大阪・金剛寺金堂大日如来像は、『金剛寺文書』より治承・養和年間(一一七七〜八二)頃の制作と推定され^(注一二)、「折衷型」の出現のおおよその目安を十二世紀第四四半期以降と考えた。また作者については、奈良仏師による在銘像では(2)の形式に統一されることから、(2)の形式の特徴の一部を取り入れた「折衷型」は、奈良仏師以外の仏師系統によると推測した。

ここで改めて本像の裙・腰布の着衣形式をみると、堅固な規範性を有する(1)平安時代後期の典型形式のうち、菩薩形像に用いられる「大倉普賢型」、および(2)奈良仏師作例にみられる典型形式が、ともに衣文線の方法や衣の重なり方は異なるものの三段にあらずのに対し、本像は五段にあらず点で(1)(2)

の形式とは異なる。かつ本像三段目の腰布とみられる臀部をめぐる部分において衣文線を衣縁と平行にあらず点に、「折衷型」の特徴を指摘することができる^(注一三)。拙稿では臀部をめぐる腰布に衣縁と平行の衣文線をあらわし、着衣を四段にあらず特徴は、平安時代後期においては菩薩形像(「大倉普賢型」)には認められず、不動明王像などの明王像に限って用いられたことを指摘し、「折衷型」は、十二世紀半ば以降の奈良仏師作例の典型形式の要素の一部に取り入れながら、平安時代後期の明王像の典型形式(「定禪寺不動型」)を菩薩形像に転用したものと想定した^(注一四)。その一方で、本像の正面での両脚部の形式は、裙を右足に敷き込む点において平安時代後期の「大倉普賢型」「定禪寺不動型」に共通する特徴を踏襲している。

なお本像の着衣形式については、武笠朗氏が背面腰部で裙の折返しの下に腰布の横方向の衣文線をあらわす点が、安元二年(一一七六)、円成寺大日如来像などにみられる腰布の新たな着衣形式と関係があることを指摘されている。またこの特徴は、宮城・お薬師様文化財保存会所蔵千手観音菩薩坐像(小松寺旧在)や、岩手・松川二十五菩薩堂二十五菩薩像、岩手・東川院観音菩薩坐像にもみられることを指摘されている^(注一五)。他像については後述したいが、松川二十五菩薩堂像のうち坐像や、東川院像は「折衷型」に分類することができる^(注一六)。

裙・腰布の着衣形式における「折衷型」については、造像銘を有する作例が現時点で見いだせていないという問題はある。しかし、かつて拙稿で一覽に挙げた通り、中央およびその周辺での「折衷型」作例には、先述の『金剛寺文書』からある程度の造立

年代を推定できる金剛寺金堂大日如来像のほか、伝来が不明ながらも、法住寺殿に付設する蓮華王院に建てられ、建久三年（一一九二）の後白河法皇崩御後に法皇を葬った法華堂の本尊である可能性が指摘される妙法院普賢菩薩像^(注七)（図20・21）などが挙げられる。拙稿での「折衷型」作例一覧に加え、新たに「折衷型」に分類できた作例を加えたものは以下のとおりである。

「折衷型」作例一覧

- ・金剛寺（大阪）金堂 大日如来像
- ・金剛寺（大阪）五仏堂 大日如来像
- ・妙法院（京都）普賢菩薩像
- ・金剛峯寺（和歌山）一字金輪仏頂像
- ・西南院（和歌山）大日如来像
- ・天神神社（静岡）大日如来像
- ・正覚院（香川）観音菩薩像
- ・法輪院（滋賀）如意輪観音菩薩像
- ・観音寺（滋賀）聖観音菩薩像
- ・中尊寺（岩手）一字金輪像
- ・瑠璃光院（岩手）大日如来像
- ・大長寿院（岩手）大日如来像
- ・東川院（岩手）観音菩薩像
- ・松川二十五菩薩堂（岩手）二十五菩薩像のうち坐像一七など

このように、「折衷型」作例に妙法院像や金剛寺金堂像など、

中央仏師の関与が想定されている作例^(注八)を含むことは注目される。これらの作例は各地に点在しているものの、一定の型としての共通性を有することから、奈良仏師以外の中央仏師に採用された形式が各地に及んだか、あるいは中央仏師の関与を積極的に想定することのできる一群と捉えることができるだろう。このようにみたときに、中央およびその周辺での造像にあらわれる「折衷型」の新形式を本像も採用している点は、平泉周辺での造像環境と関わる点で注目される。

ところで、本像のほかの細部形式についてみると、螺髻は平安時代後期の大日如来像の典型であることが指摘され^(注九)、紐一条―連珠文―紐一条―列弁―花形とする天冠台の意匠、左脇腹辺でいったんたるませ、主条上端より垂下させる条帛のかけ方なども、平安時代後期の典型的な菩薩形像と変わらない^(注一〇)。この点より、本像の形式は大半が平安時代後期の中央の典型的な菩薩形像にみるものと共通する一方で、裙・腰布の着衣形式のみ、十二世紀末にあらわれる新形式を用いていることがわかる。

本像の制作時期については、おもに中尊寺金色堂諸仏との比較から指摘され、おおよそ十二世紀前半から後半まで幅がある。例えば中尊寺金色堂中央壇との共通性を指摘する説^(注一一)、西北壇本尊阿弥陀如来像（基衡壇分）や西南壇観音・勢至菩薩像（図22）（もと基衡壇分^(注一二)）との共通性を指摘する説^(注一三)がある。中央壇諸仏の制作年代は、金色堂創建の天治元年（一一二四）（棟木銘）頃とする見解が一般的であるが、もと基衡壇諸仏の年代については、十二世紀後半のなかで幅がある。基衡壇の年代について議論はあるものの、少なくとも本像の裙・腰布の着衣

形式の特徴からみれば、本像の制作時期として十二世紀前半は考えにくいと言えるだろう。像の一部分のみの特徴であるため、今後作風や関連作例との比較を合わせ総合的に判断すべきではあるが、堅固な規範性を有していた平安時代後期の典型形式に対し、中央で「折衷型」があらわれるのが十二世紀第四四半期頃であることを考えると、本像もその頃の作とみるのが自然と思われる。

三、平泉およびその周辺の菩薩形坐像の着衣形式

前述のとおり、本像と同様、裙・腰布の着衣形式において「折衷型」に分類できる作例が、平泉およびその周辺に比較的多く確認できることを指摘したい。

まず中尊寺山内では、一字金輪像^(注二四)(図23)、大長寿院大日如来像^(注二五)(図24・25)が挙げられる。一字金輪像について、保存状態のよい左腰部をみると^(注二六)、正面両脚部の形式を除いて、下半身の着衣を五段にあらわす点や衣の重なり方、各段での衣文線の方向などが本像と共通する。大長寿院像は一段目の裙の下端を二段目の中に入れる点^(注二七)が本像や一字金輪像と異なるものの、四段にあらわし、二段目の衣文線を衣縁と平行にあらわす特徴は平安時代後期の菩薩形像の典型形式とは異なり、「折衷型」に分類できる。

平泉周辺では、東川院観音菩薩像^(注二八)(図26・27)、松川二十五菩薩堂二十五菩薩像^(注二九)が挙げられる。東川院像は四段にあらわし、一段目の下端を二段目の中に入れる。松川二十五菩薩堂像のうち跪坐像や立像以外の坐像(坐像一〜七^(注三〇))〔図28・

29〕も、基本的には衣文線の方向などが本像や東川院像などと共通する^(注三一)。また両脚部材が接続しない坐像八〜一三においても、例えば坐像一一(図30)では一段目の裙折返し部と、二段目の臀部をめぐり衣縁と平行の衣文線をあらわす腰布、およびわずかに三段目の一部が認められる。さらに両脚部材のみの坐像一四、一五、脚部の一部の坐像一六、一七についても、衣縁と平行に衣文線を刻む腰布とみられる部分と、例えば坐像七の三段目のように膝上までを覆う着衣が認められる。坐像一〜七の例をみれば、これらも同じく「折衷型」であった可能性が高いだろう。

おわりに

以上のように、平泉とその周辺に認められる「折衷型」作例の存在は、中央で十二世紀第四四半期以降に現れた新形式が平泉におよび、平泉において定着していったさまを具体的に知ることができる事例としても貴重と言える。武笠朗氏は、本稿で取り上げた平泉内外の諸像について、作風や形式からもと基壇壇分の西南壇両脇侍像に似た作例として取り上げられ、秀衡時代の造像とされている^(注三二)。本稿では一部分のみの考察となったが、裙・腰布の着衣形式における中央造像での変遷と照らし合わせても年代に齟齬はなく、これらの諸像は、秀衡時代の造立と推定する一材料となりうるだろう。

今回、本像の作風について述べる事ができなかったが、本像の上唇に対し下唇の幅が狭い唇の形、やや吊り上がった目や眉の輪郭などは、基衡のための西北壇阿弥陀如来像(図31)に通じる

ところがある。小ぶりな目鼻や浅い衣文線、丸みのある体軀からは穏やかさが感じられる。本像は、こうした平安時代後期らしい作風のなかに、十二世紀第四半期以降の新しい要素を一部に取り入れたことが具体的にわかる秀衡時代の作例として、改めて注目される。

〔図版出典〕

図1～13、28～30は東京藝術大学美術学部芸術学科日本・東洋美術史第四研究室撮影。

図14・15は山本勉・浅見龍介・丸山士郎「大倉文化財団普賢菩薩騎象像調査報告」(『MUSEUM』五七四、二〇〇一年十月)、図16・17は丸尾彰三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集』平安時代造像銘記篇第八卷(一九七一年二月、中央公論美術出版)、図18・19は『魅惑の仏像二八 大日如来』(一九九六年十月、毎日新聞社)、図20・21は注一七論文、図22・31は注一書⑨、図23は注一書③、図24・25は注二四報告書、図26・27は注二八書から転載させていただいた。

〔付記〕

瑠璃光院大日如来像の調査に際しまして、瑠璃光院菅野康純様、中尊寺管財部三浦章興様より多大なるご高配を賜りました。また東京藝術大学松田誠一郎教授、和田圭子非常勤講師をはじめ、芸術学科日本・東洋美術史第四研究室より、調査、撮影のご助力をいただきました。瑠璃光院、中尊寺、二十五菩薩像保存会からは写真掲載のご許可を賜りました。心より御礼申し上げます。本稿は、平成二七～三〇年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(B)「鎌倉時代彫刻史における京都仏師の造像ネットワークに関する研究」(JP15K16644)、および令和四～六年度科学研究費補助金基盤研究(C)「古代・中世北東北の仏教彫刻における造形の伝播過程解明の研究」(JP22K00156)の研究成果の一部です。

一 瑠璃光院大日如来像についてふれたおもな論考、作品解説を挙げる。
 ①「木造大日如来坐像」(『中尊寺大観』、一九一八年五月、精華社)。
 ②「木造大日如来坐像」(『中尊寺総鑑』、一九二五年三月、大塚工藝社)。
 ③石田茂作「国宝 金剛界大日如来像」(『中尊寺大鏡』第二、一九四一年十一月、大塚工藝社)。

④倉田文作「重文 大日如来坐像 一軀 瑠璃光院」(石田茂作監修『中尊寺』、一九五九年十一月、朝日新聞社)。

⑤久野健「中尊寺彫刻とその周辺」中(『美術研究』二二五、一九六三年十月、同著『東北古代彫刻史の研究』、一九七一年十月、中央公論美術出版)所収。

⑥西川新次「中尊寺の文化財 彫刻」および西川杏太郎「大日如来坐像」(藤島亥治郎監修『中尊寺』、一九七一年三月、河出書房新社)。

⑦永井信一「大日如来像」(『中尊寺とみちのくの古寺』(『日本古寺美術全集』第一六卷)、一九八〇年一月、集英社)。

⑧岩佐光晴「中尊寺の美術工芸のうち「彫刻」(須藤弘敏・岩佐光晴『中尊寺と毛越寺』(『日本の古寺美術』一九)、一九八九年十一月、保育社)。

⑨浅井和春「大日如来坐像」(『中尊寺黄金秘宝展 奥州平泉文化の全貌』、一九九三年八月、中尊寺黄金秘宝展実行委員会)。

⑩政次浩「大日如来坐像」(佐川美術館編『国宝中尊寺展—奥州藤原氏三代の黄金文化と義経の東下り—』、二〇〇四年十月、佐川美術館)。

⑪浅井和春「中尊寺の彫刻」(『世界遺産 中尊寺』、二〇一〇年七月、中尊寺)。

⑫武笠朗「院政期彫刻史における中尊寺造像」(菅野成寛監修、浅井和春・長岡龍作編『中尊寺の仏教美術 彫刻・絵画・工芸』(『平泉の文化史』三)、二〇一二年四月、吉川弘文館)。

三 前掲注一書③。

四 東京国立博物館に、本像の正面、左側面、背面の原板が所蔵される。そのほかの法量は以下の通りである(単位センチ)。

髪際高	四四・五	頂—顎	二二・八	面長	一〇・五
面幅	一〇・一	耳張	一一・九	面奥	一三・五
肘張	二八・八	胸幅	一七・一	胸奥	一五・〇
腹奥	一四・三	膝高	七・三	膝張	四〇・二
坐奥	二八・七				

五 この二段目は、一段目の折りたたみや打ち合わせによって、一段目と三段目との間にわずかに隙間ができた部分にあらわされる。

六 本像の品質・構造の概要については、すでに先学による作品解説の

なかでふれられている(前掲注一)。

七 なお、前掲注一書⑤では、本像の構造について、体部は左右矧ぎ、頭部は前後矧ぎで首柄をもうけて体部に接続すると述べられている。この指摘は、本像の左右耳の直後に亀裂が縦に入り、頭部では前後矧ぎのようにみえることなどが関係すると思われる。表面および像内からの観察によると、亀裂は頭部のみで、体部には確認できない。また像内からみると正中の矧目は髻や頸部にも確認できる。この頭部の亀裂は、あるいは頭部の割矧ぎ目かとも思われたが、体部は正中矧ぎであることや、表面地髪部左側面では、耳後ろから続く亀裂以外にも、髻基部へ向かう放射状の割れが認められることから、割れの可能性も捨てきれない。像内矧目に補修があり、すべての矧目や木目を確認できないため、ここでは注記するにとどめたい。

八 表面の漆地には二種類が認められた。黒漆地は断文が見られ、当初とみられる。その上に赤茶色の漆地に金箔がほどこされる。この赤茶色の漆地には断文はみられない。二層に重なる漆地のうち、上層の赤茶色の漆地および金箔が後補とみられる。

また本像の両手先について、後補かと指摘される場合がある(前掲注一書④⑤⑩)が、手の甲の一部に当初とみられる錆地が及ぶことや、腕からの造形のつながりが自然であることから、当初の可能性を留保したい。

九 拙稿「平安時代末期から鎌倉時代初期奈良仏師の新形式形成とその展開—菩薩形・明王坐像における裙・腰布の着衣形式の検討より—」(『美術史』一六一)、二〇〇六年十一月。

一〇 代表的な作例として、菩薩形像では大倉文化財団普賢菩薩像(十二世紀前半)、明王像では定禪寺不動明王像(十一世紀後半)を挙げた。

二 奈良仏師に典型的形式には二種類あり、代表的な作例として、安元二年(一一七六)、運慶作、円成寺大日如来像、正治二年(一一〇〇)頃、快慶作、金剛峯寺孔雀明王像を挙げた。

三 ①武笠朗「大阪・金剛寺多宝塔大日如来像について」(『MUSEUM』四四五)、一九八八年四月。

②武笠朗「大阪・金剛寺金堂大日如来像考」(『実践女子大学 美術史学』二〇、二〇〇六年一月)。

金剛寺は、『金剛寺文書』より治承二年(一一七八)に八条院の祈願所となり、同文書「阿観上人事」において、治承二年に金堂建立、養和元年(一一八一)に伝法会を修始とある。武笠氏は、上記の史料および養和二年の「源貞弘田地施入置文」に初めて伝法会のことが見えることから、重要法会である伝法会は金堂で行われたと想定され、伝法会開始の養和年間頃には金堂と本尊は造立されていたと述べられた。そして金剛寺金堂大

日如来像の造立年代を、治承二年の金堂建立を含む治承・養和年間頃に求められると指摘された(大阪・金剛寺金堂大日如来像考)。

三三 なお、「折衷型」作例の多くは四段にあらわすことが多く、その場合は臀部をめぐる二段目の衣文線が衣縁と平行にあらわされる。本像は五段とするのは、前述のとおり一段目と三段目の間からわずかにのぞく裙表を一段と数えるためであり、基本的な構成は四段の「折衷型」と変わらない。なお、拙稿(前掲注九)において、本像の着衣の段数を四段としたが、調査時の熟覧の結果、五段に訂正する。また、本像と同様に二段目に裙表がわずかにのぞき五段とする例に、中尊寺一字金輪像が挙げられる。

一四 前掲注九拙稿。

一五 前掲注一書⑫。

一六 お薬師様文化財保存会所蔵千手観音像(小松寺旧在)も「折衷型」とみられる。今後熟覧のうえ改めて検討したい。

一七 伊東史朗「妙法院普賢菩薩騎象像について」(『佛教藝術』一九四、一九九一年一月。同著『平安時代彫刻史の研究』、二〇〇〇年四月、名古屋大学出版会)。

伊東氏によると、妙法院像は、宝暦年間(一七五一―一七六四)に他所より移安されたことが明治時代の『京都府寺誌稿』より判明するが、それ以前の伝来は明らかでない。伊東氏は、蓮華王院には安元二年(一一七六)に後白河法皇が自らの墓所として建立し、同年に崩御した建春門院滋子の墓所に充てた法華堂と、建久三年(一一九二)の後白河法皇崩御後に法皇を葬った法華堂の二字があるとされる。妙法院像は天衣を別材製とすることや、右肢を半歩踏み出した象の表現に鎌倉的要素がみられるとし、上記二つの堂宇のうち安元二年ではなく建久三年頃の法華堂の本尊と推測された。

一八 前掲注一七論文、および前掲注一二論文②。

一九 武笠朗「院政期主流仏師(円・院派奈良仏師)の動向とその遺品の研究」(『鹿島美術財団年報』五、一九八七年、鹿島美術財団)。

二〇 平安時代後期の天冠台、条帛の形式については、武笠朗氏による下記の研究がある。

武笠朗「西大寺四王堂十一面観音像について」(『美術史』一一〇、一九八六年四月)および前掲注一書⑫。

三 前掲注一書④、⑥の西川杏太郎氏解説、⑦、⑧など。なお⑥西川新次氏は十二世紀中葉もしくはそれを遡るころとされている。

三三 中尊寺金色堂の須弥壇三壇(中央壇、西北壇、西南壇)に安置された諸仏は、一部が当初の安置場所から入れ替わっていることが指摘されている。本稿も浅井和春氏の当初の安置復元案に従う(浅井和春「金色堂の

諸仏をめぐる二・三の問題」(前掲注一書⑨))。

三三 前掲注一書⑨、⑪、⑫など。

二四 水野敬三郎氏は、一字金輪像の年代について、本体は中尊寺金色堂のもと基壇諸像(西北壇阿弥陀、西南壇両脇侍、中央壇六地藏、中央壇二天像)と、また宝冠の宝相華文の花芯および天蓋の八葉蓮華の蕊の特徴は秀衡壇(西南壇)と共通することを指摘された。ただし像本体と宝冠・天蓋との間に年代差を考えることは不自然であろうと述べられている(水野敬三郎「一字金輪坐像および天蓋」(『中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の美術工芸品に関する総合的調査研究』(研究代表者・有賀祥隆『平成八・九・十年科学費補助金(基盤研究A)』研究報告書)、一九九九年三月。水野敬三郎「中尊寺一字金輪像について」(『佛教藝術』二七七)、二〇〇四年十一月 所収)。

二五 岩佐光晴「大日如来坐像」(前掲注二四報告書)。

二六 中尊寺像は、もと像内取付の延宝四年(一六七六)の修理銘札に大破していたと記されるように、その際の修理とされる部分も多い。特に着衣では、右腰部の後補材に小材を挿んだ木屎漆を盛って腰布の衣文をあらわしており、これらの材および木屎漆は後補であることが指摘される(前掲注二四水野氏論文)。水野氏論文の図解によれば、腰部左側面には、修理の手は入っていないようである。表面からの観察においても、腰部左側面の状態は問題ないものと思われる。

二七 「折衷型」の作例では、一段目の下端を二段目(五段にあらわし二段目が裙表の場合は三段目)の中に入れるものと、外に出すものの二種類がある。前者は奈良仏師作例にみられる典型形式の特徴と、後者は平安時代後期の典型形式の特徴と共通する。「折衷型」は新旧の形式の特徴が混在した形式であるため、両様が認められるものと考えられる。

二八 井上大樹氏は、東川院像の作風や頸部で鋸引きする技法が中尊寺金色堂西南壇地藏菩薩像のうち右列二番目の像と共通することから、この技法は秀衡時代に平泉にもたらされたものとされ、本像の造立も一一七〇〜八〇年代と想定された(井上大樹「東川院木造観音菩薩坐像について」(『一関市博物館第二六回企画展 木造観音菩薩坐像とその周辺』、二〇一九年七月、一関市博物館)。

二九 富島義幸氏は、松川二十五菩薩堂像にみられる宝相華文の花蕊が金色堂西北壇(基壇)阿弥陀如来像の光背光脚にみられることなどから、松川二十五菩薩堂像は基壇周辺の造立とされている(富島義幸「松川阿弥陀迎接像の造形とその特徴―平泉仏教文化圏における位置づけをめぐって―」(『一関市博物館研究報告』二〇、二〇一七年三月))。

三〇 各像の番号は、『松川二十五菩薩像の全貌 平泉文化の余光』(二〇

一六年、一関市博物館) および鈴木弘大「岩手県指定有形文化財「木造来迎阿弥陀及菩薩像」の基礎検討―いわゆる「松川二十五菩薩像」について―」(『一関市博物館研究報告』二〇、二〇一七年三月)に従った。

三 一段目の裾折返し部下端をあらわすか、あらわさないかは像によって多少異なる。例えば坐像六は、一段目の裾折返し部の下端をあらわす。

三 前掲注一書⑫。

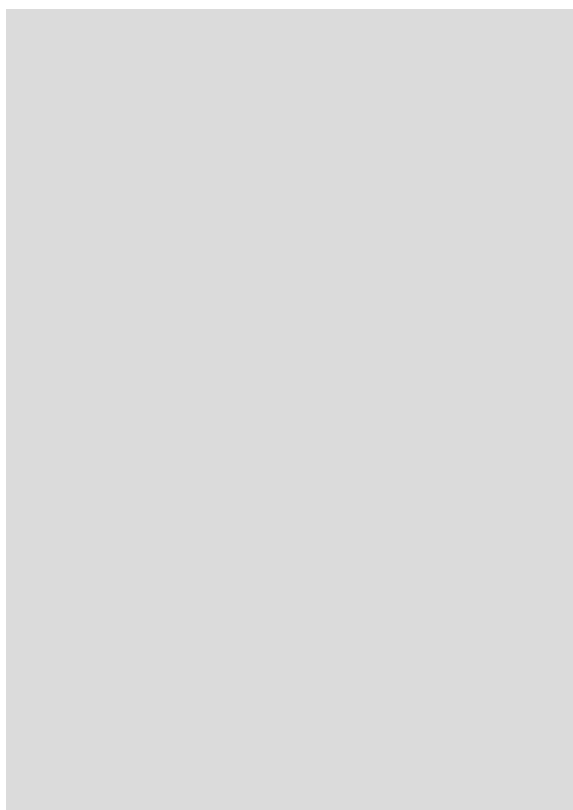


图2 同 背面

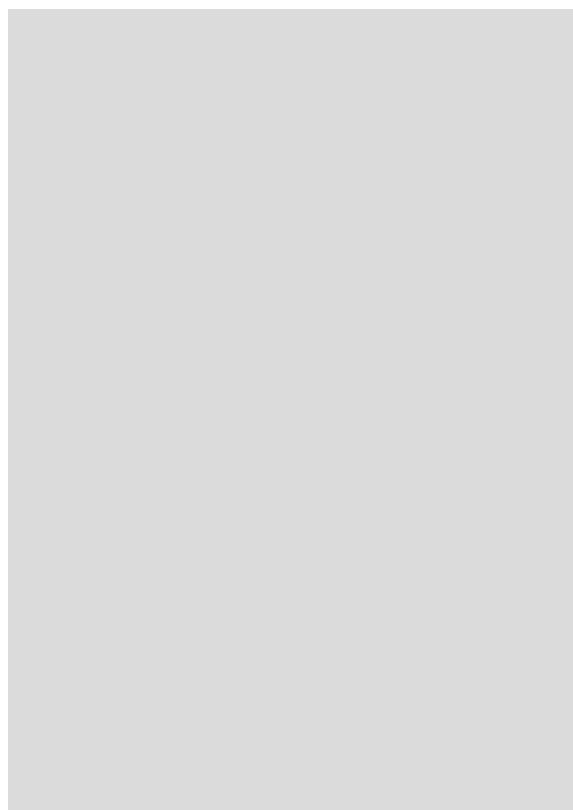


图1 大日如来像 正面 岩手・瑠璃光院

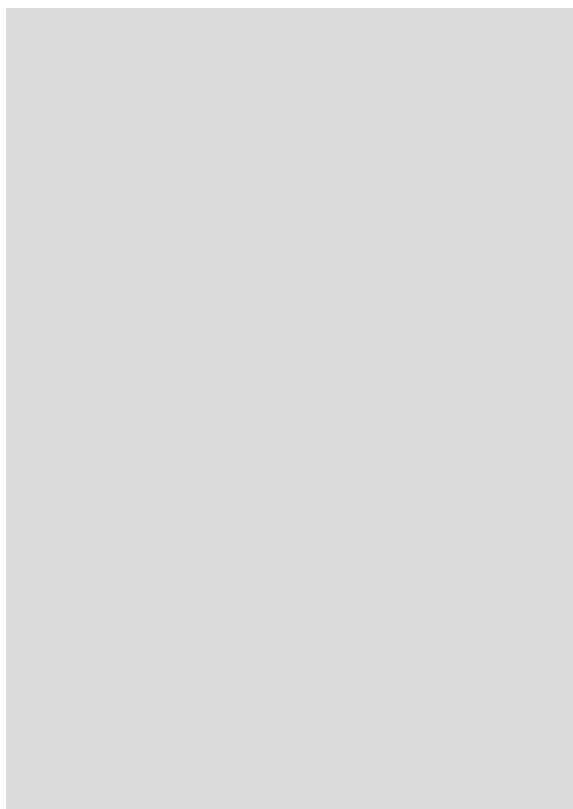


图4 同 右侧面

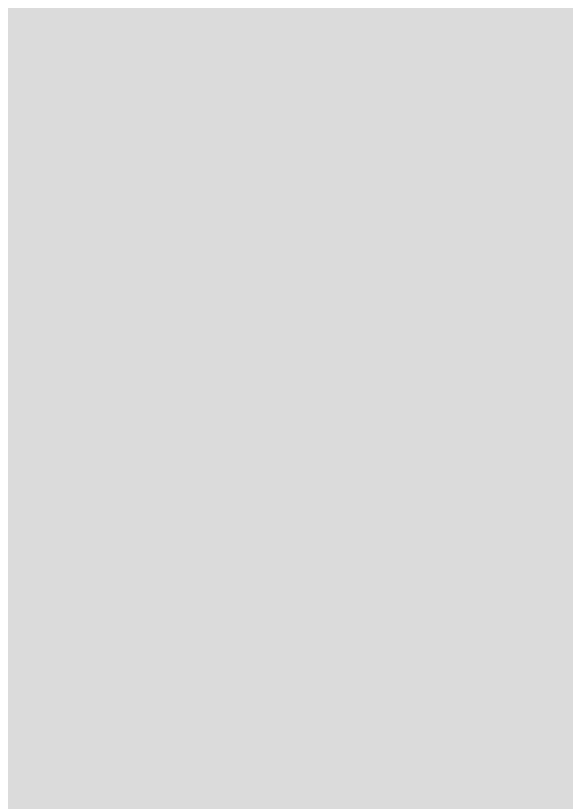


图3 同 左侧面

(63)

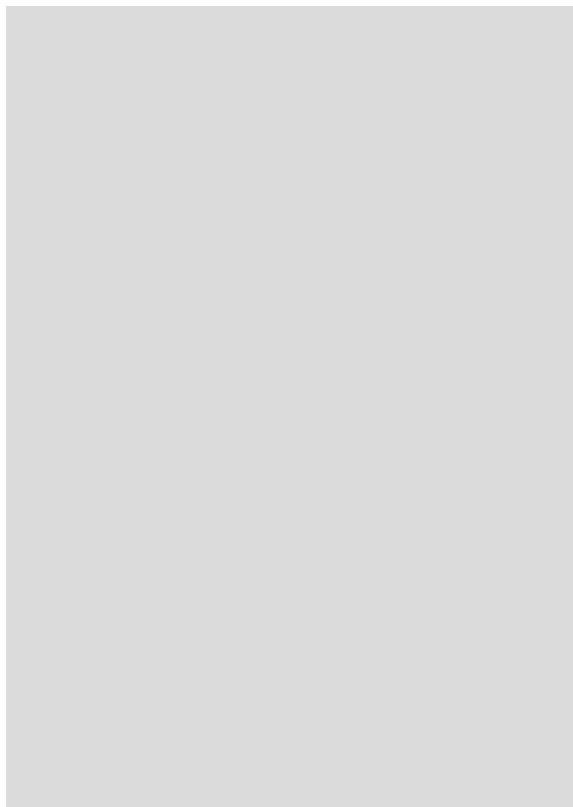


图6 同 右斜側面

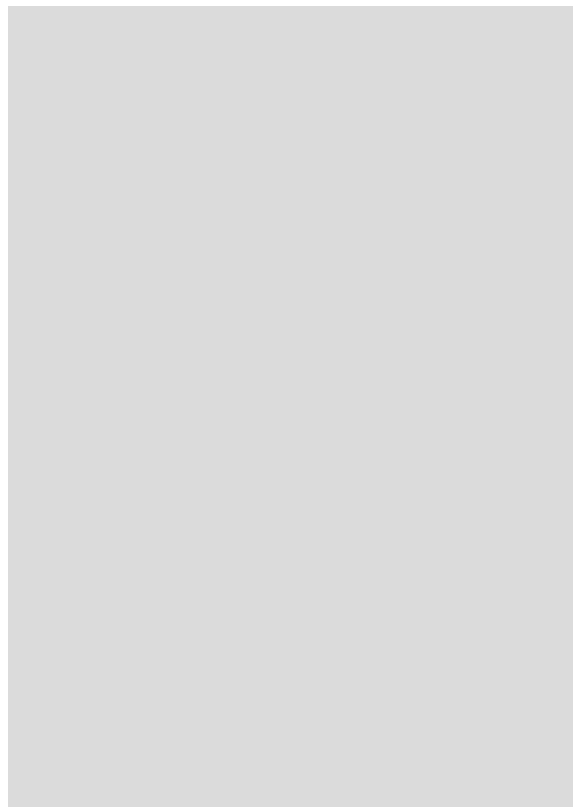


图5 大日如来像 左斜側面 岩手・瑠璃光院

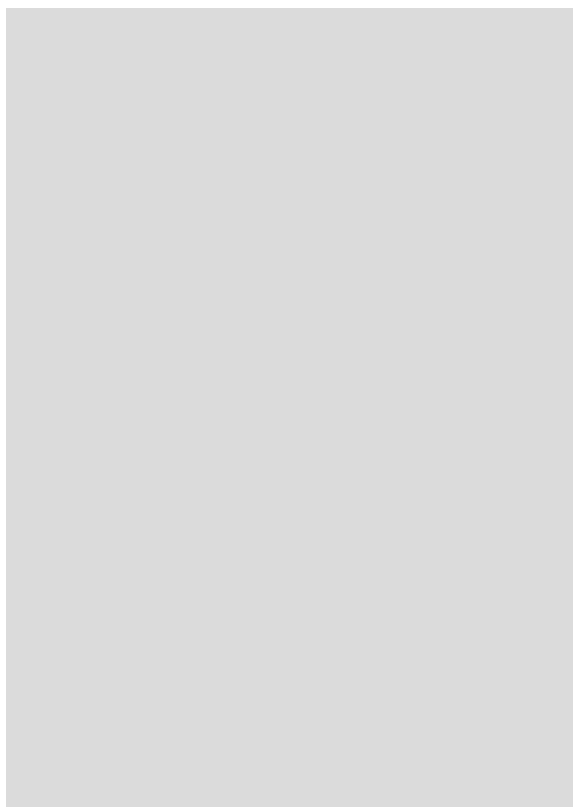


图8 同 頭部右斜側面

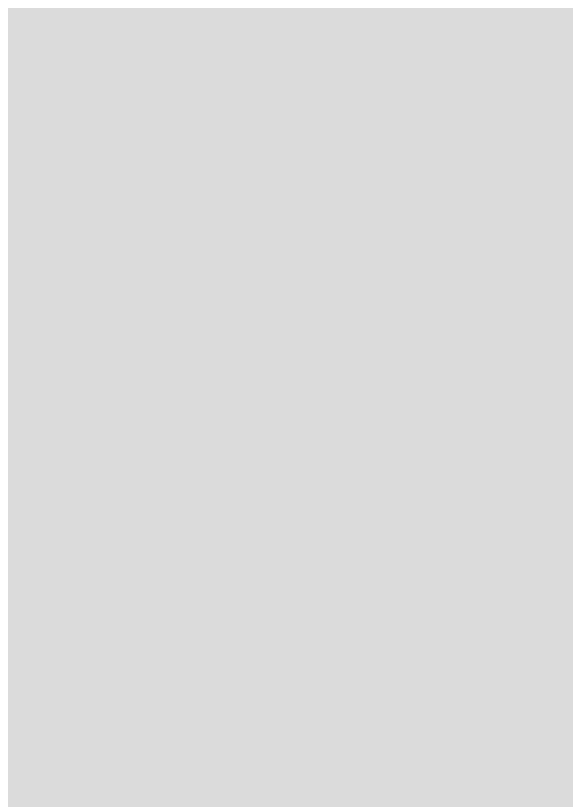


图7 同 頭部正面

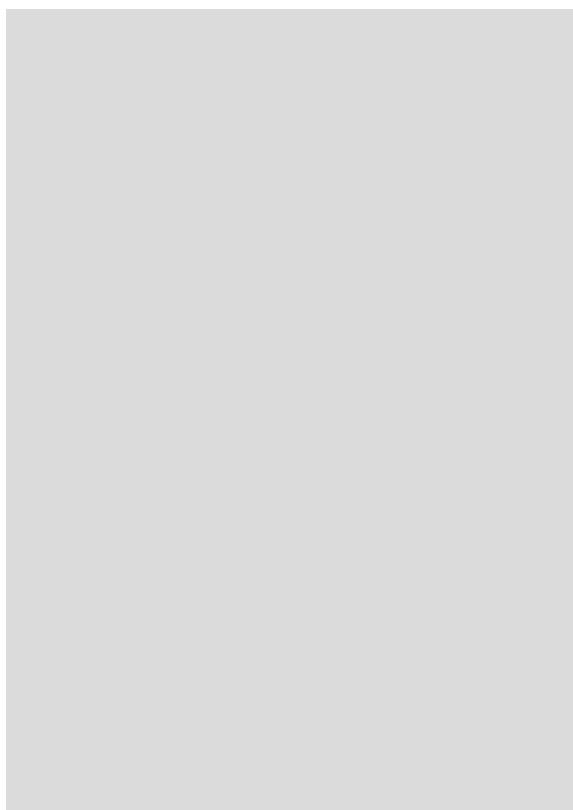


图 10 同 頭部右側面

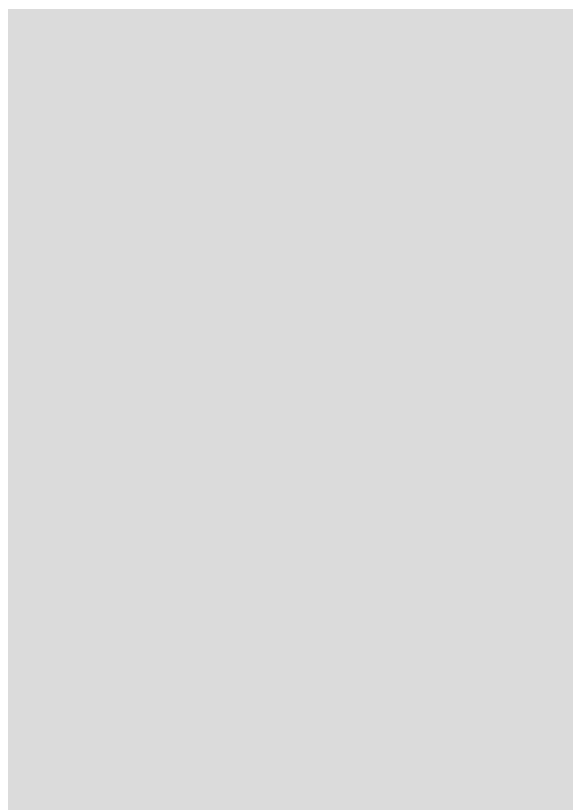


图 9 大日如来像 頭部左側面 岩手・瑠璃光院

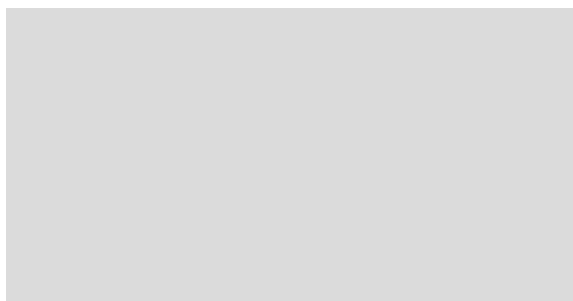


图 12 同 腰部左側面

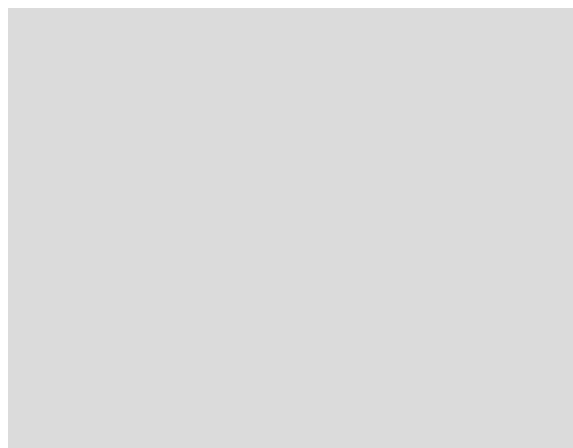


图 11 同 像底

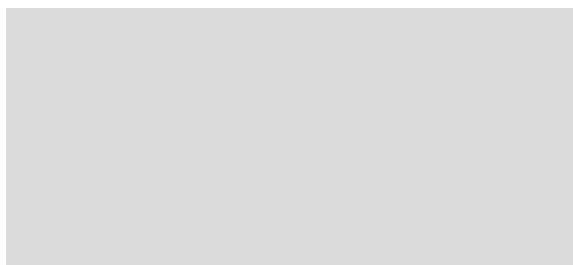


图 13 同 腰部背面

(65)

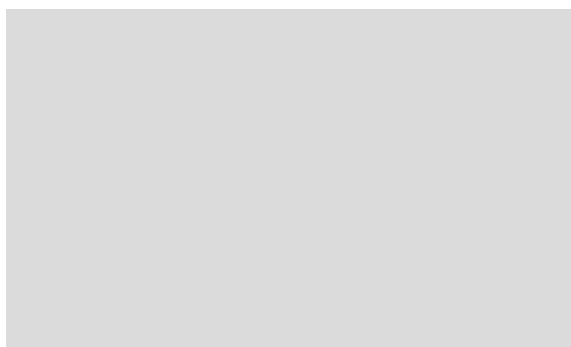


图 16 不動明王像 腰部右側面（「定禪寺不動型」）

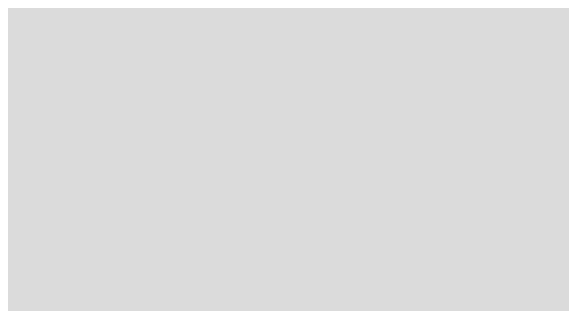


图 14 普賢菩薩像 腰部左側面
東京・大倉文化財団（「大倉普賢型」）

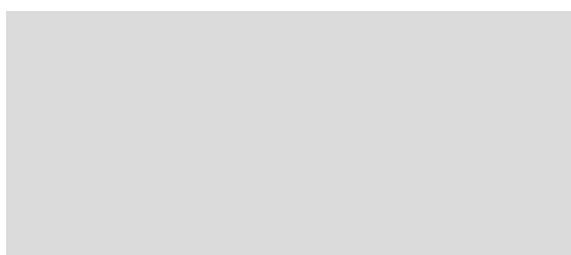


图 17 同 腰部背面（「定禪寺不動型」）

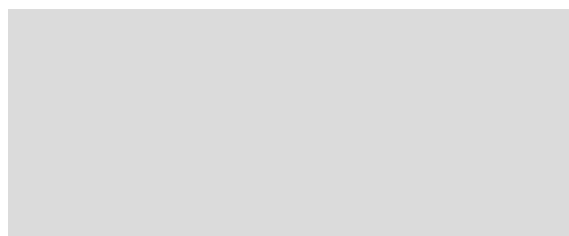


图 15 同 腰部背面（「大倉普賢型」）

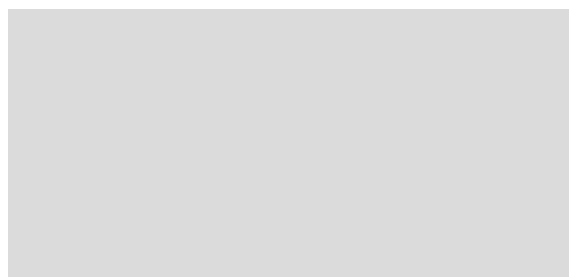


图 18 大日如来像 腰部左側面
奈良・円成寺（「円成寺大日型」）

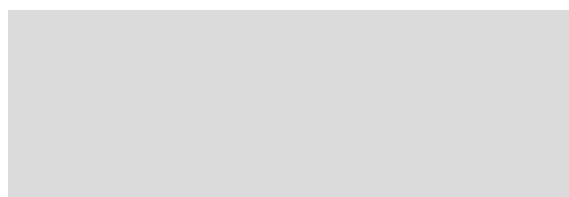


图 19 同 腰部背面（「円成寺大日型」）

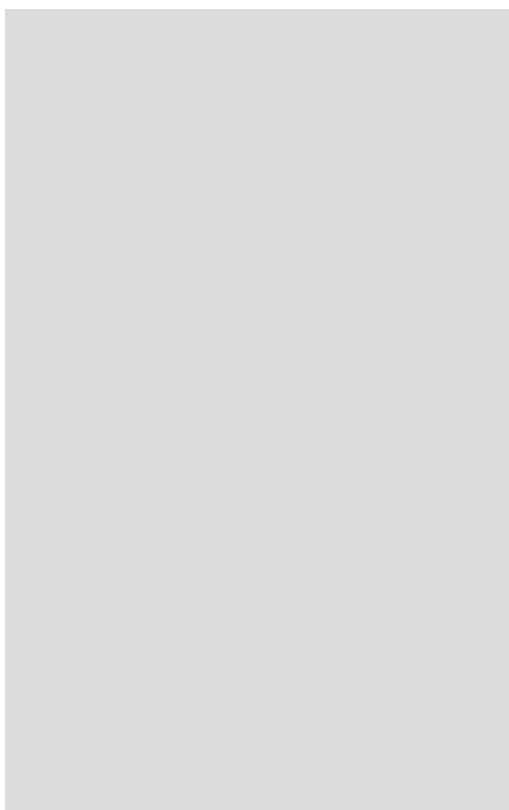


图 21 同 背面 京都・妙法院

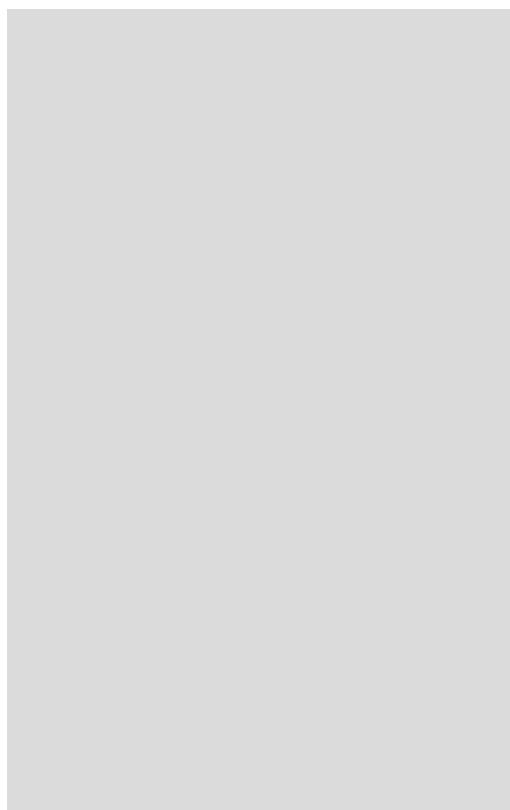


图 20 普賢菩薩像 左側面 京都・妙法院

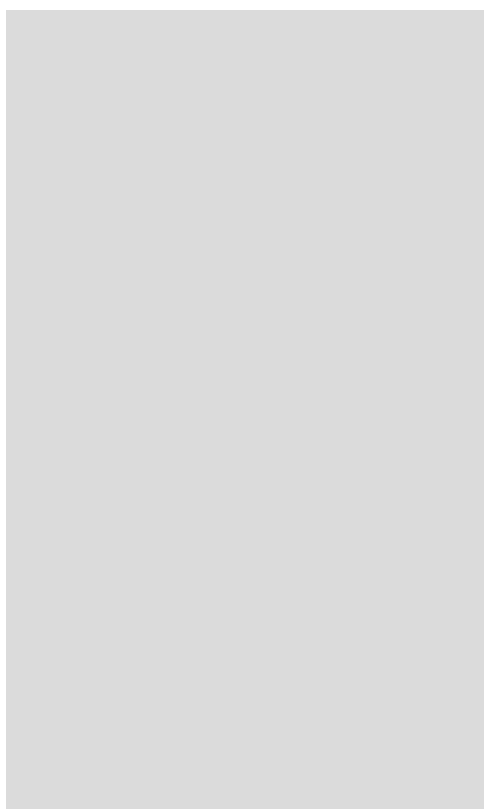


图 23 一字金輪像 岩手・中尊寺

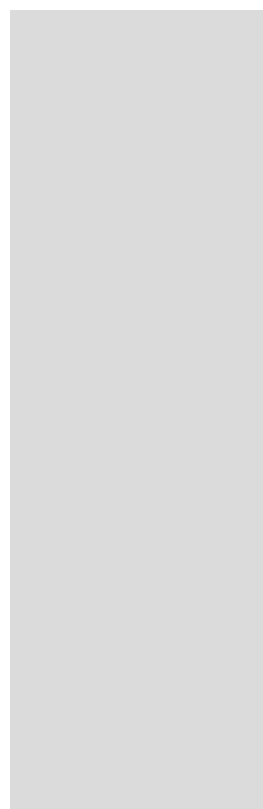


图 22 勢至菩薩像 (西南壇)
岩手・中尊寺金色堂

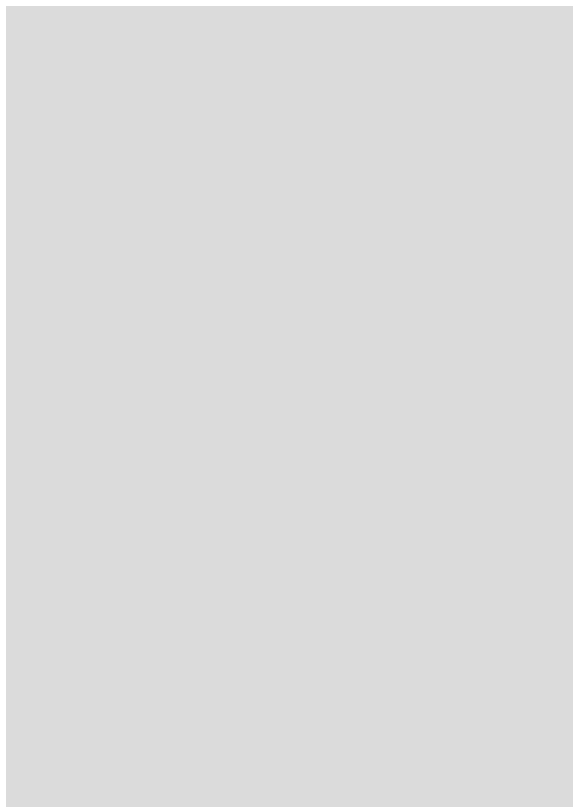


図 25 同 背面

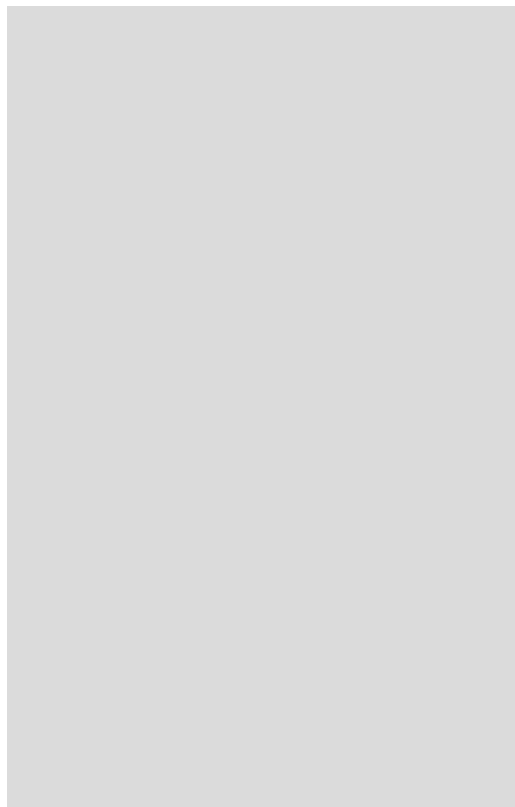


図 24 大日如来像 左側面 岩手・大長寿院

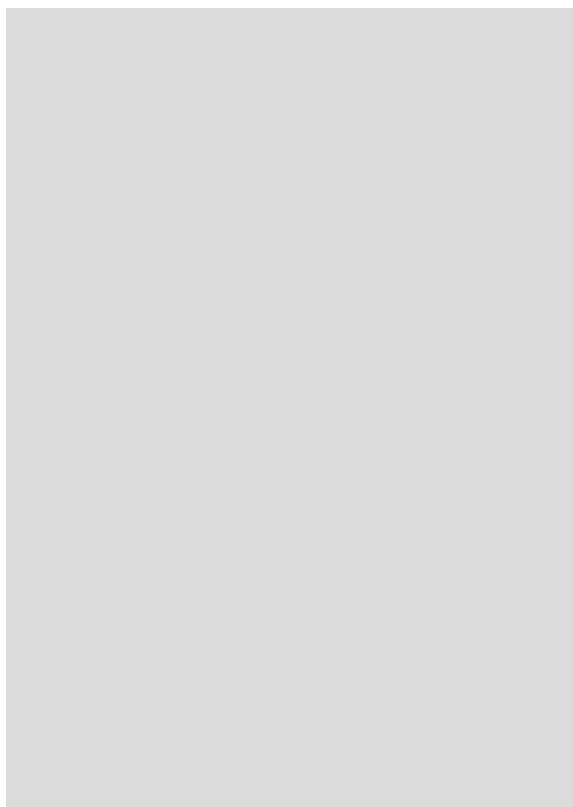


図 27 同 背面

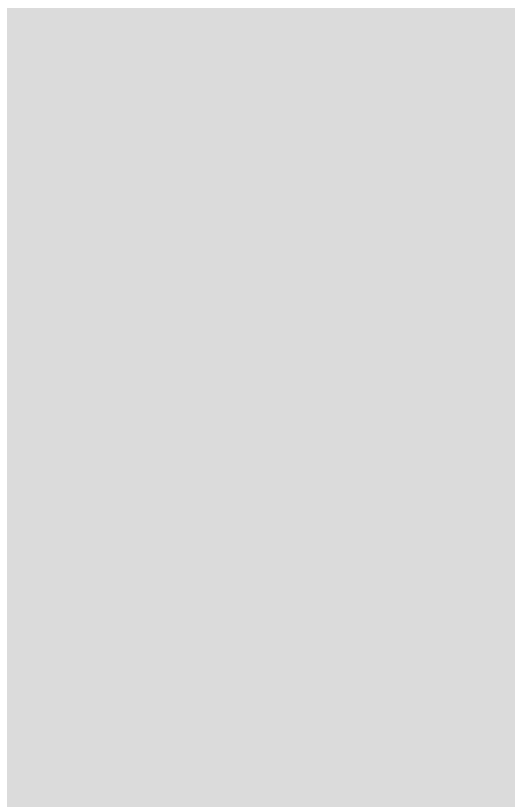


図 26 観音菩薩像 左側面 岩手・東川院

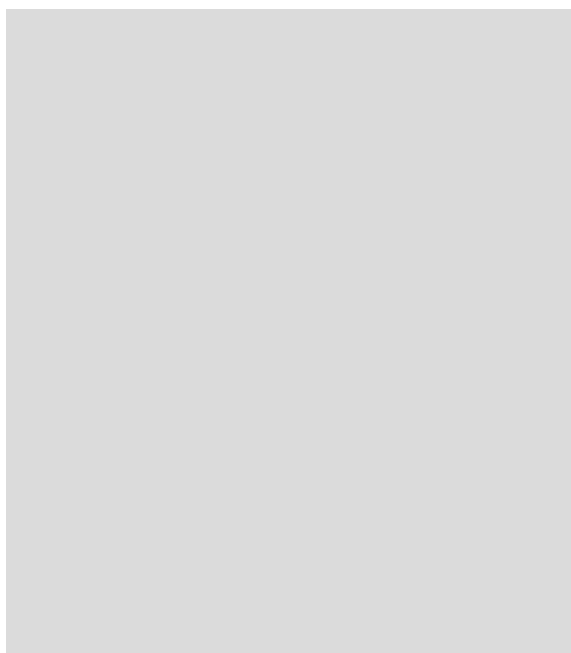


図 29 同 背面

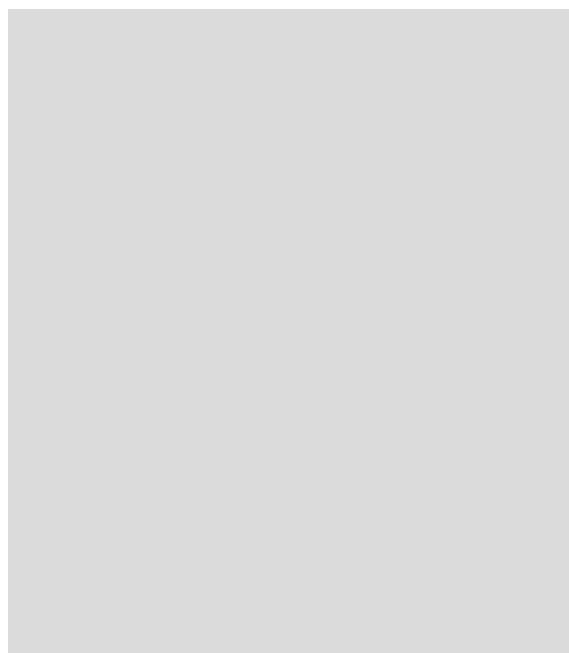


図 28 二十五菩薩像のうち坐像 7 左側面
岩手・松川二十五菩薩堂

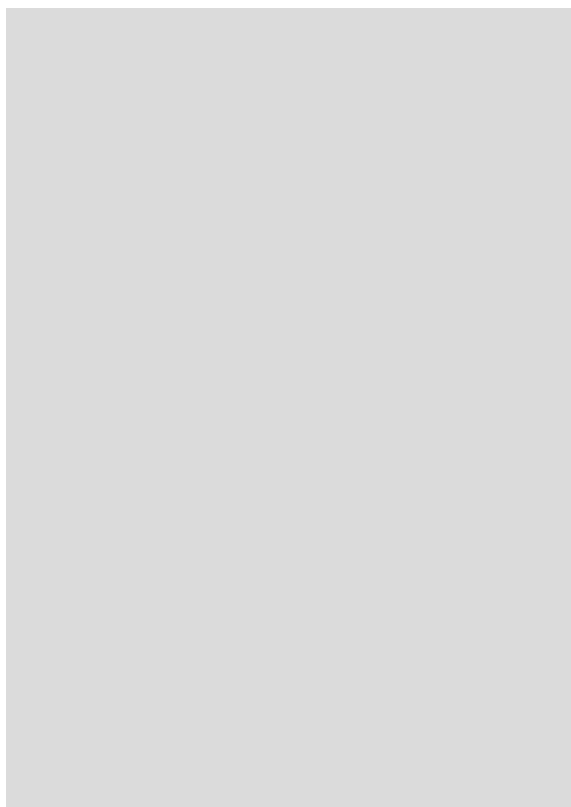


図 31 阿弥陀如来像（西北壇） 頭部正面
岩手・中尊寺金色堂

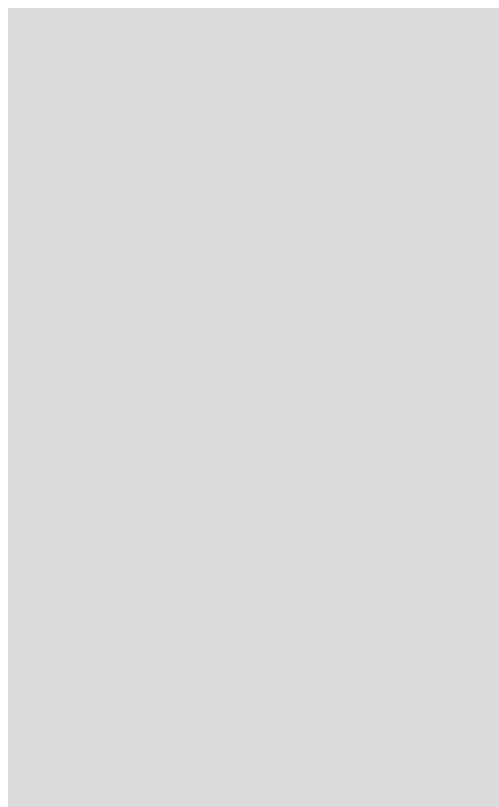


図 30 二十五菩薩像のうち坐像 11 左側面
岩手・松川二十五菩薩堂